

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K06633

研究課題名(和文)日本型ジェントリフィケーションによる「らしさ」の喪失と価値判断としての理論化

研究課題名(英文)Theorizing the value of "Rashisa(Authenticity)" amid the loss of "Rashisa" by Japanese gentrification

研究代表者

内田 奈芳美(Uchida, Naomi)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：10424798

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、都市における「ジェントリフィケーション」という都市変化のメカニズムを基盤として、都市の「らしさ」という都市魅力の価値判断の理論化を目的とした。本研究ではジェントリフィケーション「理論」の整理、日本型の実態分析、及び研究対象地域でのアクションリサーチを方法論として、「理論整理からの分析の枠組みの構築」「理論枠組みの発展と現場への応用分析」「『らしさ』の価値判断の理論化による提言」を並行して研究を進めた。対象地域における都市固有の価値としての「らしさ」の喪失と再創造の実態を明らかにし、最終的に都市政策への提言として「らしさ」という都市の魅力についての価値判断の理論化をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

経済活動と連動した都市変化を表現する概念として「ジェントリフィケーション」という言葉が変化し、資本の流入と都市変化、ある社会階層における嗜好に合わせた風景変化を表す言葉として用いられるようになったが、日本では、そういった資本と人の動きが変化させる空間についての概念を分析に十分に取り入れてこなかった。本研究では本概念を応用し、日本におけるそういった都市変化によって喪失しつつある都市の「らしさ」を分析に用いることに学術的意義があると考えた。また、「らしさ」を言語化し、理論化することは、現場のまちづくりにおいての社会的意義があるものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to theorize the value of the city's "Rashisa (authenticity)" with the analysis of mechanism of "gentrification" that is caused by the return of capital and people to the city. In this study, I researched the current theories of gentrification to set the framework for the analysis of Japanese cases. Then, I analyzed the actual condition of Japanese gentrification through the field study and action research in targeted case study areas. Gentrification caused the loss of "Rashisa" and the theorizing it through discussion with communities to make a proposal for urban policy to share and foster the value of "Rashisa" as a part of outcomes of this research.

研究分野：工学

キーワード：都市 ジェントリフィケーション らしさ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は日本が成熟社会というパラダイム変化を迎えた中で、空洞化と併存して進行するまだらな都市変化圧力について、都市における資本と人の回帰という視点から「日本型ジェントリフィケーション」という日本固有の都市変化のメカニズムを基盤として、アクションリサーチによる現場実態の調査をふまえて都市の「らしさ」という都市魅力の価値判断の理論化を目的とした。その背景は以下の通りである。

第一に経済活動と連動した都市変化のメカニズムについて、これまでは明確なシステムの解明とそれに対する理論的注意喚起が無かったという点である。この都市変化とは、例えば地方都市においては政策的意図(再開発・インフラ整備・中心市街地活性化)と観光地化による人口減少の中のまだらな都市変化のことである。このような中で、鷲田(2007)が指摘するように近年ことさらにその場所「らしさ」を強調する言説が増加しているのは、逆に都市の「らしさ」が危機であることを示しており、都市の風景変化と「らしさ」という固有価値の喪失は連動している。しかし、そういった現象に対する理論化は曖昧なままで十分でなく、この危機については地方創生という政策上の文脈からも、都市の魅力の持続可能性を担保する上で避けられない議論である。第二に、そういった都市変化を表現する概念として、米・英では「ジェントリフィケーション」という居住者の変化を示してきた言葉が変化し、資本の流入と都市変化、ある社会階層における嗜好に合わせた風景変化を表す言葉として用いられるようになったということがある。一方日本では、そういった資本と人の動きが変化させる空間についての概念を分析に十分に取り入れてこなかった。この「ジェントリフィケーション」をもたらず原動力を分析する論説には二つの流れがあるとされている。(Brown-Saracino, 2010)まず Smith(1996)によるサプライサイドからの説明として、再投資が起こり「資本」の都市への回帰運動として発生するという論説がある。一方で、デマンドサイドからの説明として、Brown-Saracino (2010)では、David Ley の 1986 年のカナダにおける分析を引用し、感覚や景観のアメニティなど「人」が嗜好に起因して場所を変えると論じている。またこれらの背景から、ジェントリフィケーションが起きた結果、Zukin(2010)は中産階級が流入し、建物の再利用を行うことで中心地のイメージを変え、消費の場となった結果「オーセンティシティ」が失われたと評している。ここで言う「オーセンティシティ」の喪失は、日本語に訳せばまさに「らしさ」の喪失である。

これらのような都市の実態、および学術的背景から、ジェントリフィケーションの状況下における都市における「らしさ」の価値を明らかにすべく、本研究の着想に至った。

背景における参考文献

- ・ 鷲田清一「京都の平熱」講談社(2007)
- ・ Neil Smith “The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City” Routledge(1996) [原口剛訳『ジェントリフィケーションと報復都市 新たなる都市のフロンティア』ミネルヴァ書房(2014)]
- ・ Japonica Brown-Saracino 「The Gentrification Debates」Routledge(2010)
- ・ Sharon Zukin “Naked City”(2010) [内田奈芳美他訳『都市はなぜ魂を失ったか』講談社(2013)]

2. 研究の目的

そこで本研究では、都市における資本と人の回帰という視点から「日本型ジェントリフィケーション」という固有のメカニズムを背景として、その上で「らしさ」という都市の価値判断を理論化することを目的とした。

まず理論的側面として「ジェントリフィケーション」の論説の実態を整理する。米英の本分野の先行研究では定義は多様化し、その発生と影響についての議論が活発に行われてきた。

次に、「日本型ジェントリフィケーション」という都市風景の変化をもたらず資本と人の動きのメカニズムを明らかにすべく、ジェントリフィケーションが進行した結果、喪失・再創造する可能性が大きくなる都市の価値としての「らしさ」を、都市魅力を守るための価値判断の方途として理論化をおこない、都市政策にむけた提言を形成する。

3. 研究の方法

本研究では、ジェントリフィケーションとその関連「理論」の整理、日本型ジェントリフィケーションの実態分析、及び研究対象地域でのアクションリサーチを包括的な方法論として、「理論整理からの分析の枠組みの構築」「理論枠組みの発展と現場への応用分析」「『らしさ』の価値判断の理論化による提言」を並行して研究を進め、最終的に都市政策への提言として「らしさ」という都市の魅力についての価値判断の理論化をおこなう。

4. 研究成果

本研究は都市における資本と人の回帰という視点から「日本型ジェントリフィケーション」という日本固有の都市変化を前提として、都市の「らしさ」という都市魅力の価値判断の理論化を目的とするものである。この中では、理論構築とアクションリサーチの両側面から研究を行ってきた。以下その両側面における研究成果を示す。

(1) 理論構築

上記の研究目的に沿って研究・分析を行った。まず、以下は基礎的理論の整理である。基礎的理論として第一に『まちづくり教書』の中で、「まちづくり」の意味の変化に伴う理論として整理した。この中では現代的なまちづくりの潮流として、「対資本力のまちづくり」として

のジェントリフィケーションと、「『らしさ』強調のまちづくり」を位置付けた。この二つの側面は、開発・観光プレッシャーの中でのまちづくりとしての主要課題であり、社会的影響とそこから生まれる「対応」としてのまちづくりの発展が求められる。その点について、「領域」と「価値」という点から、現代の都市変化に対してあるべき「対応」についての論述をおこなった。次に基礎的理論整理の第二点目として、J. ジェイコブズの理論を再検討した。「『アメリカ大都市死と生』的価値観と『その後』の都市」として、現代ではジェイコブズの価値観の「消費」とジェントリフィケーションが起きていること、また、そのことに対するプランニングのありかたについて議論を整理した。これに加えた理論の整理として、「米国のジェントリフィケーションの実態と課題」として「ジェントリフィケーションを巡る議論」について、発生要因、プロセスと帰結について、本論考の前半部分で現代におけるジェントリフィケーション論の全体像の整理を行った。

これらをふまえた応用的思考として、空間における「公」の喪失と「共」の台頭についての論を「東京に「公」空間はあるか」として執筆した。空間利活用のような社会的「対応」が新たなまちづくりを生じさせることも、ジェントリフィケーション現象の土台的理論であると考えられる。さらに、次の理論につながる理論の発展形として「都市のオーセンティシティのゆらぎと解釈」を論考として執筆し、本論考の前半で「らしさ」の理論化を試みた。また、そのような「らしさ」が都市再生のための空間でどのように翻訳されているか、その要素と背景を論述し、そういった「らしさ」のための空間形成のありかたについて、考察を行った。

これらの整理と論考から、J. ジェイコブズ以来の都市の価値付けが現在のまちづくりへとつながり、その結果としてジェントリフィケーションによる空間利用の変容と「らしさ」の喪失が進んでいったと考え、これらが理論的分析の枠組みとなった。以上の土台としての理論整理と並行して、研究対象事例における理論的整理と地域分析を以下の様に行った。

地域分析の一つ目として、首都圏での都市変容の分析として「大宮・浦和：さいたま市の二都物語」を論考として執筆した。本論考中では、住宅地としての評価が上昇し続けている埼玉の成長コリドーとしての大宮・浦和について、マンション建設も含めた新たな層の人口流入と、それぞれの都市のらしさの源泉としての「経路依存性」から都市の実態を論じた。

さらに地域分析の二つ目として、「らしさ」の再創造に関する分析として、研究対象地である「金沢市における民間まちづくり提言の系譜」を学会発表した。本研究においては、アクションリサーチ対象とした主体も含めた民間団体がいかに金沢のまちづくりのあるべき姿を考え、提言してきたかを調査し、分析を行った。その中では、例えば文化という文脈においても施設づくりへの提言から価値づくりへの提言へと変化してきたなど、こういった提言が蓄積されてきたことを通して、金沢のまちの価値を創造する試みが綿々と続けられてきたことを明らかにした。提言の主体は多様であり、人的基盤の多層性が金沢のまちづくりを支えてきたと言える。

(2) アクションリサーチ

また、地域におけるアクションリサーチについては、特徴の異なる二つのエリアを対比することで、「対応」としてのまちづくりがより明確に論として構築されたと考えた。

第一に、東京郊外部における調査がある。埼玉県下で、参与観察を伴うコミュニティ活動分析として、地域のコミュニティの変化についての聞き取り調査を行った。この中で、これまでとは異なる動きとしての人の流入が変化させた地域像について、聞き取りを通して明らかにした。埼玉においては、人口流入により変化した地域の実態について調査・分析を行い、研究発表を行った。

第二に、新幹線開通後の金沢市のアクションリサーチでは「らしさ」意識の議論と聞き取り調査を行い、「らしさ」を担保するための地域資源活用について参与観察として地域コミュニティと議論を行い、現場で都市の変質についての議論に参加することで、地方都市中心市街地におけるジェントリフィケーションの芽を実践的に整理することができた。これらのアクションリサーチの成果として、金沢市における資本の流入とそれに対するコミュニティの動きについては、前述した埼玉における調査と対比させながら” The Transformation of Community in the Situation of the Declining Population in Japan”として国際学会で発表を行った。

加えて現地の協力を十分に受けることが可能であった金沢市では、北陸新幹線開通後の金沢市の実態を対象としたアクションリサーチとして、「金沢らしさ」を明らかにし、共有するための現場のまちづくり活動における議論に参加し、「らしさ」のための共通言語化を行ってきた。このことを踏まえて、「コミュニティ活動分析」として、アクションリサーチの成果のひとつとして具体的な「らしさ」づくりの検証と合わせたまちづくりの提言づくりを行った。この提言もいわば「対応」としての新たなまちづくりであり、そういった視点からも「らしさ」再創造の理論化を行った。これらの成果は「Advocacy for fostering Kanazawa's Ra-shi-sa (uniqueness/identity) and culture-led Machizukuri (community planning)」として研究発表を行った。これは、新幹線前後で変化する中でのまちづくりの価値判断のための住民活動のプロセスから、現在のアクションリサーチを位置づけたものである。このような言語化から、現場での議論を通して、まちづくり提言である【世界趣都 金沢 2030 実現への12のメソッド】を作成し、広く共有した。この中では「金澤尺度」の熟成、など「らしさ」のあり方についてこれまでの蓄積をふまえて提言が構築されている。そして、それが実際の金沢のまちづくりでどう応用できるのか、フィードバックをふまえてそのあり方についてアクションリサーチを行い、「らしさ」という価値の理論化の現場における応用としての検証をおこなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 内田奈芳美	4. 巻 244
2. 論文標題 米国のジェントリフィケーションの実態と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 建築の研究	6. 最初と最後の頁 26-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田奈芳美	4. 巻 67
2. 論文標題 大宮・浦和：さいたま市の二都物語	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 76-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田 奈芳美	4. 巻 19
2. 論文標題 文化のまちづくりとシビックプライド～金沢における2つの循環～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Think-ing	6. 最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 内田 奈芳美	4. 巻 619
2. 論文標題 東京に「公」空間はあるか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地域開発	6. 最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田奈芳美	4. 巻 1
2. 論文標題 「経済的側面を超えた、地方都市の持続価値」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 「限界住環境のゆくえ」日本建築学会都市計画委員会	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田奈芳美	4. 巻 38
2. 論文標題 都市のオーセンシティのゆらぎと解釈	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域経済学研究	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Naomi UCHIDA
2. 発表標題 Advocacy for fostering Kanazawa 's Ra-shi-sa (uniqueness/identity) and culture-led Machizukuri (community planning)
3. 学会等名 The 11th Conference of the Pacific Rim Community Design Network (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田 奈芳美
2. 発表標題 東京近郊都市の商店街の活性化ビジョンとコミュニティの変化
3. 学会等名 日本建築学会学術講演会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naomi UCHIDA
2. 発表標題 “ The Transformation of Community in the Situation of the Declining Population in Japan ”
3. 学会等名 The 10th Conference of the Pacific Rim Community Design Network (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 内田 奈芳美
2. 発表標題 金沢市における民間まちづくり提言の系譜
3. 学会等名 日本建築学会学術講演会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 塩沢由典・玉川英則・中村仁・細谷祐二・宮崎洋司・山本俊哉編集、片山義博・塩沢由典・中村仁・平尾昌宏・榎文彦・矢作弘・玉川英則・五十嵐太郎・細谷祐二・荒木隆人・宮崎洋司・中野恒明・窪田亜矢・宇沢弘文・間宮洋介・松本康・吉永明弘・佐々木雅幸・吉川智教・牧野光朗・岡本信広・内田奈芳美・岡部明子・山形浩生他 11 名著	4. 発行年 2016年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 352(pp.314-321)
3. 書名 『別冊環・ジェイン・ジェイコブズの世界』 「 『アメリカ大都市の死と生』 的価値観と 『その後』 の都市 」	

1. 著者名 佐藤滋・饗庭伸、内田奈芳美編著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 鹿島出版会	5. 総ページ数 310(pp.40-52, 134-135, 181-186, 188-191)
3. 書名 『まちづくり教書』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----